

No.1319 犬の脾臓腫瘍 摂南大学

【動物】 イヌ, ヨークシャテリア, 雌, 13歳3か月

【臨床症状】 食欲低下により動物病院を受診し、画像検査にて脾臓に腫瘍が確認されたため、脾臓摘出手術を受けた。胸部画像検査では異常はなかった。

【肉眼所見】 脾臓の中央部に膨隆した10×10×7 cm大の腫瘍が存在し、その腫瘍は胃に近接していた。腫瘍を覆う脾臓固有被膜は一部破綻し、腫瘍表面に大網が癒着していた。腫瘍は軟性で、その断面は白色を呈していた。

【組織所見】 脾臓腫瘍は被膜に被覆されず、腫瘍辺縁ではリンパ濾胞構造を含む結節性過形成の組織が少量観察された。腫瘍全体では紡錘形を主体とした間葉系の腫瘍細胞が混交もしくは花むしろ指紋状の束状配列を示して増殖していた。類円形や多核の増殖細胞も少数混在し、腫瘍細胞間にはリンパ球、形質細胞が様々な程度に認められた。増殖細胞は概ね細胞境界がやや不明瞭で、少量からやや豊富な弱好酸性の細胞質と軽度の異型を示す類円形から楕円形の核を有していた。有糸分裂総数は16/10HPFであった。腫瘍巣内には散在性に壊死巣がみられ、壊死巣周囲ではしばしば好酸性の豊富な細胞質を有する多核巨細胞が少数観察された。免疫染色では腫瘍細胞の多くはVimentin, 各種組織球マーカー (Iba-1, CD204, MHC class II, S-100) に陽性を示したが、多核巨細胞は組織球マーカーに陰性となった。

【診断】 結節性過形成に発生した限局性組織球性肉腫

【考察】 犬の組織球性肉腫は播種性組織球性肉腫 (DS) と限局性組織球性肉腫 (LS) に分けられる。DSはリンパ節を超えて波及し、複数の臓器に複数の病変を形成する。LSは単一の部位/臓器に病変を形成し、リンパ節を超えて波及しない。いずれの場合も病理組織学的には豊富な細胞質を有する多型細胞とその多核細胞が増殖すること多いが、紡錘形細胞のみが肉腫様に増殖することもある。組織所見、免疫染色結果に加え、脾臓摘出時にリンパ節腫大や他臓器に腫瘍は確認されていないことも考慮し、上記診断とした。(阿野直子)

【参考文献】

- 1) Moore A.S, et al. Histologic and immunohistochemical review of splenic fibrohistiocytic nodules in dogs. *J. Vet. Intern. Med.* **2012**, 26:1164–1168.
- 2) Moore, P.E. A review of histiocytic diseases of dogs and cats. *Vet Pathol.* **2014**, 51:167-184.